

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370005

研究課題名(和文)「幻覚からの議論」への適切な対応についての考察：選言説と表象説の比較を通して

研究課題名(英文) A Study of Reasonable Responses to "the Argument from Hallucination": In Comparison between Disjunctivism and Representationalism

研究代表者

横山 幹子 (YOKOYAMA, Mikiko)

筑波大学・図書館情報メディア系・准教授

研究者番号：40302434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幻覚からの議論の妥当性を考察した。幻覚からの議論によれば、知覚についての日常的な考えは幻覚の可能性と矛盾し、それゆえ日常的な考えは間違っている。私は、幻覚からの議論への答えとして理解される知覚的経験についての主要な説、知覚の選言説や知覚の表象説を検討した。また、知覚についての日常的な考えを正しいと考えるためには、幻覚的経験や真正な知覚的経験をどのように説明すべきかについて検討した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I examined the argument from hallucination. According to the argument from hallucination, the everyday conception of perception is incompatible with the possibility of hallucination and the everyday conception is therefore false. I examined the major theories of perceptual experience as responses to the argument, disjunctivism and representationalism. I also investigated how to explicate the notion of veridical perceptual experience and the notion of hallucinatory experience in order for the everyday conception of perception to be true.

研究分野：哲学

キーワード：知覚 選言説 表象説 志向説 素朴实在論 幻覚からの議論 知覚的経験 幻覚的経験

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 哲学において、一時期あまり論じられなくなっていた知覚の問題は、研究開始当初、再び重要な課題として注目されるようになっていた (Smith, A. D. *The Problem of Perception*. Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 2002. や Fish, W. *Philosophy of Perception: Contemporary Introduction*. New York and London, Routledge, 2010. 等)。そして、その動きは、わが国でも同様であった。(小口峰樹. 知覚の命題的構造：概念主義の経験的基盤の研究. 科学哲学. vol. 44, no. 1, 2011, p. 1-16. や小草泰. 「経験的透明性」は経験の現象性と志向性の関係について何を示しているのか. 科学哲学. vol. 44, no. 1, 2011, p. 17-33. 等)。

(2) 哲学における知覚についての議論の中でも、ヒントンが最初に提唱したと言われる知覚の選言説 (Hinton, J. M. *Experiences*. Oxford, Oxford University Press, 1973. ) は、20 世紀の終盤から注目を浴びようになってきていた説であり、スノードン (Snowdon, P. *Perception, Vision and Causation*. *Proceedings of the Aristotelian Society*. New Series Vol. 81, 1980/81, p. 175-192. 等) やマクダウエル (McDowell, J. *Criteria, Defeasibility, Knowledge*. *Proceedings of the British Academy*. Read 24 November, 1982, p. 455-479. 等) マーティン (Martin, M. G. F. *The Transparency of Experience*. *Mind & Language*, vol. 17, no. 4, September, 2002, p. 276-425. 等) らによって主張されていた。我が国においても、2012 年度応用哲学会年次大会で、「知覚の哲学の最近における展開を巡って：「選言主義」を軸として」というシンポジウムが行われ、選言説を巡る議論が盛んになされていた。そして、この知覚の選言説を

他の知覚についての説、たとえば志向説 (表象説) と比べる動き (小草泰. 知覚の志向説と選言説. 科学哲学. vol. 42, no. 1, 2009, p. 29-49. ) もあった。私自身もその問題に取り組んでいた (横山幹子. 選言主義と感覚的視覚的想像. 図書館情報メディア研究 2008. vol. 6, no. 2, 2009, p. 1-13. )。

(3) そこでの重要な問題の一つは、古くからの「錯覚からの議論」や「幻覚からの議論」 (Ayer, A. J. *The Foundations of Empirical Knowledge*. London, Macmillan and Company Limited, 1958. ) にどのように答えるかという問題であった。「錯覚からの議論」や「幻覚からの議論」とは、錯覚や幻覚のような知覚の誤りを認めることと、われわれが知覚について日常的に考えている素朴實在論的な考えが矛盾するのではないかというものである。その問題は、真正な知覚的経験とはどんなものであり、幻覚的経験や錯覚的経験とはどんなものであるのかという問題と密接にかかわっていた。さまざまな装置の開発が進み、真正な知覚と幻覚や錯覚とが区別しにくくなっているように思われる現代において、その問題をうまく処理できるような知覚の説がどのようなものを明らかにする研究が必要とされていた。

## 2. 研究の目的

(1) 知覚についての選言説は、真正な知覚的経験の場合と幻覚的経験や錯覚的経験のような知覚の誤りの場合に、何らかの共通の種類のもものが感覚されていることを否定する考え方である。選言説は、その扱っている問題の特徴から、経験的選言説、認識論的選言説、現象的選言説、行為の哲学における選言説の四通りに分けられている。(Haddock, A.; Macpherson, F. ed. *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*. Oxford, Oxford University Press, 2008. )。本研究で

は、それらのさまざまな選言説のうち、「現象的選言説」に注目した。「現象的選言説」とは、われわれが外界から知識を獲得するということを保証できるのは素朴实在論であるという考えのもとで、素朴实在論を擁護するためには知覚的経験という現象をどのように考えるべきかを考察するものである。代表的な人物としてマーティンが挙げられる。

(2) 本研究に着手する以前に、私は、パトナムやマーティン、フィッシュらの議論の一部を検討することにより、選言説による知覚の誤りに対する素朴实在論擁護の議論の一部を明らかにし、それぞれの細かな点を個々に論じていた。しかし、「選言説」対「表象説(志向説)」として議論の全体を捉えたうえで、選言説による素朴实在論擁護自体の可能性全体を検討することはしてこなかった。また、現代において、知覚的経験についての問題を考える際には、認知心理学や脳神経科学における知覚的経験についての知見を無視することはできないが、それについてもあまり検討してこなかった。

(3) 上記を受け、本研究では、選言説内部の考察だけでなく、表象説との比較を通して、また、認知心理学や脳神経科学の知見も取り入れながら、素朴实在論のような「知覚についてのわれわれの日常的な考え」と矛盾しない形で、知覚の誤り(特に幻覚)を理解するためには、知覚的経験や幻覚的経験にどのような説明を与えることが適切なのかを考えることを目的とした。

### 3. 研究の方法

研究目的を達成するために、文献調査を行った。収集した文献は、素朴实在論と選言説の関係について扱ったもの、知覚の表象説を扱ったもの、知覚の誤りについて扱っている認知心理学や脳神経科学の文献であった。そ

して、収集した文献での議論の検討や、分析哲学における知覚の議論と認知心理学や脳神経科学での成果との比較を行うことにより、研究課題について考察した。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成 25 年度

素朴实在論、選言説、選言説による素朴实在論擁護についての選言説論者の考えを整理し、そこにおける問題点を検討した。そして、選言説の中でもフィッシュの考えを取り上げ、その考えが、幻覚からの議論から素朴实在論を擁護するために、それが、他の考え、たとえば、志向的对象を考えるスミスの説よりも劣っているということとはできないということを示した。(雑誌論文)

知覚の選言説で素朴实在論を擁護するためには、真正な知覚的経験とは異なるはずの幻覚的経験をどのように説明するかが大きな問題となっていた。そのため、選言説の立場から、否定的認識的性質によって幻覚的経験を説明しようとするマーティンの考え(幻覚的経験は、真正な知覚的経験から反省によって区別不可能な状態であること以外の何ものでもなく、肯定的特徴を持たない)を取り上げ、その主張とそれに対する批判を検討した。(学会発表)

#### (2) 平成 26 年度

(1)での について、新たな視点も取り入れながら、論文にまとめた。そこでは、マーティン流の否定的認識論がどんな問題(たとえば、「非人称の理想化」という問題)を含みうるのかを確認したうえで、問題全体を検討する際の基準として、「われわれの日常的な考えとの一致」という基準に焦点を当てた。それから、その基準を「非人称の理想化」の問題に使うことによって、幻覚的経験につい

ての否定的認知的な考え方の妥当性を検討し、非人称の理想化をすることはわれわれの日常的な考えと一致すると論じ、その意味で、当該の方策の妥当性は高まると主張した。(雑誌論文)

強い表象説と弱い表象説の区別や広い表象説と狭い表象説の区別などの、表象説内部での考え方の違いにも注目しながら、知覚についての表象説の考えを整理し、素朴实在論擁護という目的と密接に関係している表象説はどのようなものかについての検討を始めた。

認知心理学においてだけでなく、脳神経科学において、知覚や知覚の誤りについてどのように説明されているのかについての概略を整理した。

### (3) 平成 27 年度

知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することを議論の前提とした場合、認知心理学や脳神経科学からの知見である、「脳内の神経活動が知覚と結びついている」という考えや「幻覚的経験に対応するような脳内の神経活動がある」という考えと知覚の選言説がどのように関わるのかを検討した。そして、脳内の神経活動と表象説は親和性が高いが、選言説も脳内の神経活動と知覚的経験の関係を認めることができると論じた。(学会発表)

錯覚や幻覚のような知覚の誤りを認めることと、われわれが知覚について日常的に考えている素朴实在論的な考えが矛盾するのではないかという考えを、局所的付随性の原則(認知心理学や脳神経科学からの知見から生じるように思える原則)に基づいて主張することの妥当性を、フィッシュの議論を手がかりに検討した。そして、素朴实在論を擁護するために、日常的な考え方を重視したうえで、局

所的付随性の原則による「幻覚からの議論」の拡張段階を拒否しようとするフィッシュの方策には問題点があることを明らかにした。(雑誌論文)

(4) さまざまな装置の出現により知覚経験において今まで以上に現実と虚構の区別が難しくなっている現代において、日常からかけ離れた知覚理論をつくるのではなく、われわれの日常的な知覚についての考えを維持する方向で、また、認知心理学や脳神経科学における新たな知見と矛盾しない形で、真正な知覚的経験や幻覚的経験を説明するためにはどのような知覚理論が適切かを検討しているところに、本研究の意義と重要性がある。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

横山幹子、「幻覚からの議論」: 拡張段階と局所的付随性の原則、図書館情報メディア研究、査読有、13巻2号、2016、1-13、<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/assets/files/kenkyukiyou/13-2.1.pdf>

横山幹子、幻覚的経験についての否定的認知的な考え方、図書館情報メディア研究、査読有、12巻2号、2015、1-12、<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/assets/files/kenkyukiyou/12-2.1.pdf>

横山幹子、幻覚の可能性と素朴实在論: Fish と Smith、図書館情報メディア研究、査読有、11巻2号、2014、23-35、<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/grad/assets/files/kenkyukiyou/11-2.2.pdf>

[学会発表](計2件)

横山幹子、脳内の神経活動と「知覚の選言説」、日本科学哲学会、2015年11月22日、首都大学東京(東京都八王子市)  
[http://pssj.info/program/program\\_data/48/resume/015.pdf](http://pssj.info/program/program_data/48/resume/015.pdf)

横山幹子、否定的認知的性質による幻覚の説明、日本科学哲学会、2013年11月23日、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区)  
[http://pssj.info/program/program\\_data/46/resume46.pdf](http://pssj.info/program/program_data/46/resume46.pdf)

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

横山 幹子 (YOKOYAMA, Mikiko)

筑波大学・図書館情報メディア系・准教授

研究者番号：40302434